



Title	ニーチェにおける自然主義と率先垂範の倫理
Author(s)	竹内, 綱史
Citation	メタフュシカ. 2021, 52, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/85560">https://doi.org/10.18910/85560</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ニーチェにおける自然主義と率先垂範の倫理<sup>1</sup>

### 竹内綱史

#### はじめに

21世紀に入ってからニーチェ研究における最大のトピックは「自然主義」である。自然主義的解釈を大きく打ち出したブライアン・ライター<sup>1</sup>の著作 *Nietzsche on Morality* (Routledge, 2002, 2015) に端を発する論争は、多くの論者を巻き込み、世界的なニーチェ研究の地図を塗り替えてつつある<sup>2</sup>。本稿では、その自然主義的解釈の射程と限界を明らかにしつつ、ニーチェ哲学の新たな統一的理解をめざしたい。

「神の死」を宣告し従来の形而上学を執拗に攻撃して、「人間を自然へと翻訳し返す」(JGB230) ことを課題としたニーチェが自然主義者であるというのは、自明なことのようにも思える。けれども、「反形而上学なので自然主義」と言ったところで、「形而上学」という語の語源からして、それはほとんどトートロジーでしかない。問うべきはその場合の「自然」とは何を意味するのか、「自然主義」とはいかなる意味なのかということだが、そう問うことで、問題は一気に錯綜してくる。

一時期のニーチェが明示的に自然科学へと自らの哲学を接続していたことは確かである。所謂「中期」の始まりを告げる『人間的、あまりに人間的』(以下、『人間的』と略)の冒頭で、ニーチェは自らの「歴史的哲学」を「もはや自然科学と切り離して考えることなど決してできない」と宣言した(MA1)。だが、他の時期のニーチェは科学では捉えられない「ディオニュソス的自然」なるものを称揚し(前期)、「権力への意志」などの形而上学的な主張まで持ち出してくる(後期)。さらにその権力への意志説には「すべては解釈である」という強い構成主義的な含意があり、「自然」理解から恣意性を払拭することはできないとされる(JGB9, etc.)。このような構成主義を主軸にしたニーチェ解釈——ポストモダンの解釈——を目の敵にしているのがライターらの自然主

<sup>1</sup> 本稿は関西哲学会第69回大会(2016/10/22@大阪大学大学院人間科学研究科)での個人研究発表を基にしている。その後、日本ショーペンハウアー協会第26回ニーチェ・セミナー(2016/11/19@お茶の水女子大学)および第47回関西ニーチェ研究会(2021/9/18@オンライン)でも関連の発表をする機会を得た。それぞれの機会にコメントを下さった方々に感謝したい。

<sup>2</sup> 日本へのその紹介は、岡村 2009、須藤ほか 2013、齋藤 2014、竹内 2016b、新名 2019、大戸 2020 など参照。

義的解釈であるが、いささか結論を急ぎすぎている感を否めない。そこで、本稿では一見「自然主義」とは縁遠いように思われるニーチェの「率先垂範の倫理」と自然主義との関係からあらためて考えてみたい。

議論は以下のように進む。まず、ニーチェ哲学の自然主義的側面の内実を確認する（第1節）。次に、その自然主義が規範性をいかに位置づけるかという問題を確認したうえで、ニーチェの言う「人間の自然化」を彼の哲学のより広い文脈のなかに位置づける（第2節）。そしてその視点から、ニーチェが称揚する率先垂範の倫理を考察し、その立場をより明確にしたい（第3節）。

## 1. ニーチェの「自然主義」

哲学における「自然主義」はそれを主張する人によって内実がばらばらであることがしばしば指摘されているが、最も広くとれば、それは当然「自然を超えたものの拒否」である（cf. 戸田山 2003, 井頭 2010, etc.）。そしてどのような形でそれが主張されるかに応じていくつかの立場に分けることができるが、ここでは、哲学的自然主義の最も中心的な以下の二つのどちらにおいても、ニーチェを「自然主義者」とさしあたりは呼ぶことができることを確認しておきたい。すなわち、「存在論的自然主義」と「方法論的自然主義」の二つである。

### (1) 存在論的自然主義

これは自然を超えたいかなるものも存在しない、という主張である。この意味での自然主義をニーチェが採用していることは周知の事実であろう。

中期以後のニーチェ哲学の中心的手法は、「自然を超えた」もの、「奇跡的」なもの、「形而上学的」なものが、実は「人間的、あまりに人間的」なものにすぎないということを暴露する、というものである。「あまりに人間的」なものとは、虚栄心とカルサンチマンとかになるわけだが、それらは結局のところ人間の「自然的」な欲求に根を持つものである（あるいは「自然的」な欲求が社会性によって増幅されたものである）。つまり「自然を超えた」ものはすべて、人間の「自然的」欲求によって「でっ上げられた」ものにすぎない、ということになる。

もっとも、ライター自身は、存在論的自然主義（ライターという言葉では「実質的自然主義 (substantive naturalism)」）のコアである物理主義をニーチェが採用しているとは言えないとして、ニーチェは存在論的自然主義者ではないと見なしている（Leiter 2015, 2-9）<sup>3</sup>。たしかにニーチェは決して物理主義者ではない。「自然」を物理的なものとイコールで結ぶことには繰り返し異を唱えている（e.g. JGB 14, 22）。だがそれだからと言って、ニーチェが存在論的自然主義者ではないということにはならないだろう。むしろここにこそニーチェの自然主義の核があると考えべきなのだが、それについては後に触れることにして、まずは次のタイプの自然主義について見ておこう。

<sup>3</sup> とはいえ実際のところはライターがニーチェをなるべく物理主義に近い形で解釈しようとしているのは明白なので、あまり首尾一貫していない（cf. Emden 2014, 60-66.）。

## (2) 方法論的自然主義

これは、自然科学に先立って哲学がアプリアリに認識の基礎づけを行うという「第一哲学」理念を拒否し、哲学と科学を連続的なものと捉える立場である。「認識論的自然主義」とも言われ、現代の哲学的自然主義の中心的位置を占めている。ライターをはじめとする多くの解釈者たちは、ニーチェの立場もこの意味での自然主義であるとする。

自然科学との連続性を保持しようとする姿勢をニーチェが有していたことは、ひょっとしたら専門家以外にはあまり知られていないかもしれない。だが、20世紀後半以降に飛躍的に進展した出典研究 (cf. 竹内 2016b) が明らかにしたのは、ニーチェが若いころから非常に多くの自然科学書を読み込んでおり、同時代の最先端の科学と自らの哲学との接続に腐心していたということである。「ニーチェは思想家として活動しえたおよそ20年の間、一度として近代科学への敬意を失ったことがなかった」(須藤 2011, 330) のだ。例えば『善悪の彼岸』(以下、『彼岸』と略) では「道徳の科学 (Wissenschaft der Moral)」(JGB186) の必要性が説かれており、その具現化が「系譜学 (Genealogie)」という学 (Wissenschaft) であるのだが、『系譜学』第一論文の末尾に付された註のなかで、ニーチェは諸学の共同研究によって道徳史研究を進めるべきだと呼びかけている。そしてそのために必要なのは、「哲学・生理学・医学の間の、もともととても素っ気なくて不信感の強い関係を、非常に親密で実りある交友関係に改める」ことである、と (GM, I, 17 Anm.)。そして実際、ニーチェは『系譜学』を当時の名だたる自然科学者たちに献本しているのだ<sup>4</sup>。

自然科学とのこのような連続性の主張は、当然のことながら「第一哲学」理念の拒否も伴っている。自己観察における「直接的確実性」なるものがあり得ないことが強調され、それによる認識の基礎づけ可能性が一笑に付されている (JGB16)。その結果、「真」と「偽」という本質的対立を想定する必要はないのであって、「仮象性 (Scheinbarkeit) の諸段階を想定し、仮象 (Schein) の言わば明暗さまざまな陰影や全体的色調を、[...] 語るの十分ではないのか」、とニーチェは言うのである (JGB34)。

## 2. 人間の自然化という「価値転換」

### (1) 自然主義と規範性

以上でニーチェを自然主義者と呼ぶことに一定の理があることは明らかとなった。では次に、自然主義一般の難問である規範性の問題をニーチェがどう位置づけるかを見て行こう。それは彼の哲学の中心問題と直結しているが、ここでは以下の三つの点について考えたい。①人間の自然的な本性と「価値」や「道徳」との関係、②事実判断と価値判断の差異、③そもそもなぜ自然主義を採用す「べき」なのかという点。

①については、まさに『系譜学』が、心理学的に同定可能な心的メカニズム——例えばサンチマン——が道徳的善悪を作り上げたことを明らかにせんとする書物であったことを想起すれば

<sup>4</sup> 1887年11月8日付の出版社宛の手紙でニーチェは『系譜学』の献本を依頼しているが、そのなかには、ヴィルヘルム・ヴァント、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ、カール・フォークト、エミール・デュ・ボア＝レーモン、エルンスト・マッハらの名前が挙げられている (KSB, Bd.8, S.188; cf. Emden2014, 13)。

十分だろう。価値判断は特定タイプの者たちが自己の生存のために用いるものであって、道徳的善悪もそのような価値の一種だというのである。ある種の体質の人にとって健康に有益な食べものとそうでない食べものが存在するのと同じように、ある種のタイプの人たちが生きるのに有利な価値とそうでない価値が存在する。道徳も実はそのような価値にすぎないのに、それを自ら認めてこなかったというのが、ニーチェによる道徳批判の一つの中心論点である。道徳的価値もある種のタイプの人たちにとっての道具的な価値にすぎないのだ、と。

②については問題含みである。先のライターはこの意味での自然主義をニーチェに認めていない。諸々の価値判断が人々に因果的な影響をもたらすことは自然的事実問題として解明できるが、その影響があるタイプの人々の繁栄に有益なのかという判断（道具的価値判断）、そしてそのタイプの人たちが繁栄することそのものに価値があるのかという判断（道徳的価値判断）は、事実とは別になされるものであって、ニーチェは価値についての反実在論をとっているとライターは見る<sup>5</sup>。価値判断が人々に因果的な影響をもたらすことをニーチェは前提としており（つまり価値判断が人々の行為を導く力をもつことをニーチェは認めており）、種々のタイプの人たちに対するそのさまざまな影響については自然的事実の問題として科学によって解明可能だと考えられている。しかしそれぞれのタイプの人にとって特定の価値判断からの因果的影響が「よい」ことなのかどうか、さらには特定タイプの人たちの生存に有利な状況をもたらすことがそもそも「よい」ことなのかどうか、といった判断は事実問題ではないし、そこにはいかなる客観性も存在しない、というのである（Leiter2015, 110-132）。ニーチェの言う「健康」な「強者」が繁栄す「べき」だというのは、ニーチェ個人の主観的価値判断にすぎず、ニーチェ自身もそれを認めている、と。

だが、これは自然主義として不徹底であるだけでなく、ニーチェ理解としても問題がある。ニーチェは事実と価値の二元論をも否定しているからだ。ただ、その否定は、価値判断を事実判断へと還元するのではなく、事実判断を価値判断へと還元する、という方向である。というのも、純粋な「事実」なるものの存在をニーチェは認めていないからである。「現象（Phänomen）に立ち止まって「存在するのは諸事実のみである」と言う実証主義に対して、私は言うだろう。違う、まさにその諸事実なるものはなく、あるのは諸々の解釈のみなのだ、と」（Ende1886-Frühjahr1887, 7[60]）。これは、私たちは客観的真理に到達することはできないので常に暫定的真理（仮説）に留まらざるを得ず、それによって生きざるを得ないということの肯定である。暫定的な仮説でしかないとしても、私たちはそれを「真理」と見なして生きねばならないし、むしろそれによって生きることができるのであれば、それは「真理」である、と。有名な箇所を引いておこう。

「真理とは、それ無しではある種の生物が生きることでできないような種類の誤謬である。生にとっての価値が最終的には決定的なのだ」（April-Juli1885, 34[253]）。

<sup>5</sup> 実は、著書の第一版（2002年）ではライターは道具的価値に関してはニーチェが実在論を採っていると主張しており、それが彼の解釈の特徴として取り上げられることが多かったが（cf. 岡村2009）、第二版（2015年）ではその見解は撤回されている。第一版の解釈の方がすっきりしており魅力的ではあったが、ニーチェに則していなかったと判断したようである（Leiter2015, x; cf. Reginster2006, 274-275(note 10)）。

けれども、こうなると当然、存在論的自然主義によってあらゆる存在者がそこへと還元されるはずの「自然」とは何であるのかが問題となってくるし、先に挙げた③の問題、つまりそもそもなぜその「自然」へとあらゆるものが還元されるべきなのかが問われなければならない。

## (2) 世界観としての哲学

『彼岸』第9節でニーチェは、「自然に従って」生きるというストア派のモットーについて、それはストア的に理解された「自然」に従えと言っているのものであって、「自然が「ストアに従った」自然であることを要求している」にすぎないのだと語っている（JGB9）。だがその指摘はストア派を非難するためになされているのではない。むしろ、それこそが哲学の本来的なありようだとニーチェは主張したいのである。

「当時ストア派の者たちの身に起こったことは、哲学が自分自身を信じ始めるやいなや、今日でもなお起こることである。哲学はいつだって自分自身の像に従って世界を創造するのであって、それ以外のやり方を知らないのである。哲学とはそのような専制的な衝動そのものであり、権力への、「世界創造」への、第一原因への、最も精神的な意志なのである」（JGB9）。

ここで語られているのは、「世界」ないし「自然」は、「哲学」によって構成されるものであるということである。「世界」がいかなるものか、「自然」とはどのようなものなのかというのは、「哲学」によって違うのだ、と。ここで言う「哲学」とは、（ニーチェはこういう言い方はしないが）「世界観」のことなのである。「哲学」という語のこの特殊な用法はしかし、ニーチェにあって、とりわけ『彼岸』において、多用されている。その意味での「哲学」は、「未来の哲学の序曲」という副題を持つ『彼岸』という著作の中心テーマと言って良い。この文脈では、「哲学者」とは世界観を提示する存在と見なされることになる。「真の哲学者たちはしかし、命令者であり立法者なのだ。彼らは言う。「かくあるべし」と。[...] 彼らの「認識」は創造であり、彼らの創造は立法であり、彼らの真理への意志は——権力への意志なのだ」（JGB211）。哲学とは世界をどのように見るべきかを定めるものなのである。そしてそれがまさしく「権力への意志」の働きだというのだ。

しかるに、世界観としての哲学という点から見ると、「自然」概念の内実は哲学によって違うのであるから、ニーチェの存在論的自然主義、「人間を自然へと翻訳し返す（den Menschen zurückübersetzen in die Natur）」（JGB230）こととは、一元論的に世界を理解するというものであって、それ以上ではないということになる。人間も「自然」の一部である、だがその「自然」がいかなるものであるのかはさまざまであり得る。そこでニーチェは生物学や生理学を取り入れながら、「身体という導きの糸」（26[432], Sommer-Herbst 1884, etc.）を頼りに、人間を含めた自然全体を、諸々の権力への意志の覇権争いとして解釈するという「仮説」（JGB36）を提示する。つまりここには、「自然化」すべきという第一段階の要請と、その場合の「自然」は物理主義ではなく言わば「生物主義」的に理解すべきだという第二段階の要請があるのだ。

ではまずなぜニーチェは人間と自然を一元論的に理解するべきだと考えるのか。それは、「自然を超えた存在」であることに誇りを見出していた従来の価値観を否定するためである (cf. JGB230, etc.)。「人間は自然の一部」であることに「救い」を見るという「価値転換」を遂行するためである。自然を超えた神に近く、自然とは対立的な存在であると自己理解してきた人間が、科学的世界観の浸透によって世界理解から神が排除された結果、世界の中に居場所を失ってしまった。それが「ニヒリズム」と呼ばれる状況である (cf. 竹内 2012, 2016a, 2018, 2019)。このような状況を乗り越えて世界と和解すること、それが「人間を自然へと翻訳し返す」(JGB230) ことだとニーチェは考えていたのである。

しかしなぜ物理主義ではなく「生物主義」をとるのか。物理学も自然に関する一つの解釈でしかないと言いが (JGB14)、生物主義的な権力への意志説もまた一つの自然解釈でしかないことをニーチェは認めている (JGB22)。そうすると、ライターなどの言うとおりに、これは単にニーチェの主観的な価値判断に過ぎないものだけということになるのだろうか。

### 3. 率先垂範の自然主義

ニーチェは『彼岸』(の特に後半)において、繰り返し、世界観としての「哲学」を「科学」と重ね合わせることに反対している。「科学の支配下」にある哲学など真の哲学ではない (JGB204)、哲学者を「科学的人間」と混同してはいけない (JGB205, 211)、等々。これは先に見た方法論的自然主義と矛盾することは明らかであるように思われる。哲学を科学から切り離し、特権的な地位を哲学に与え返そうとしているのではないか。

ニーチェのなかで科学と哲学という二段構えになっていることは確かである。先に挙げた『系譜学』第一論文末尾の註は、科学と哲学の共同研究を呼びかけた後で、実は、次のような文言で締めくくられている。

「今こそあらゆる科学は哲学者の未来の課題のための準備をしなくてはならない。その課題とは、哲学者は価値の問題を解決しなくてはならず、諸価値の位階秩序を決定しなくてはならないということなのである」(GM, I, 17 Anm.)。

こうした主張を見るかぎり、方法論的自然主義は、ニーチェが「道徳の類型学 [タイプ論 (Typenlehre)]」と呼ぶもの (JGB186)、すなわちさまざまなタイプの人たちに対して種々の価値がどのような影響を及ぼすのかを解明するという仕事に限定されているように思われる。そしてその仕事は、「人間を自然へと翻訳し返す」(JGB230) べき、しかも権力への意志の覇権争いという生物主義的な色彩の強い自然へと人間を還元するべきだということ、世界観としての哲学が下す要請に奉仕するものであるように思われる。そしてそのように存在論的自然主義を採用すべきという判断自身は価値判断として、ニーチェ個人の主観にしか根拠を有さず、それ自身は自然主義的なものではないように思われる。だが、本当にそうだろうか。

たしかにこの点でニーチェは普通の意味では方法論的自然主義者とは言えないだろう。しかし

生物主義的な存在論的自然主義をとるべきだという規範的主張の根拠は、単にニーチェの主観的判断とは言い切れない。むしろここにこそ、彼独自の自然主義が表れていると見るべきなのだ。

世界観としての哲学の場合、「哲学者」とは独自の世界観を実際に生きている存在として考えられている。その意味で、世界観としての哲学とは、ニーチェにあっては、「生きざま」を指してもいるのだ。哲学者とは「命令者」であり「立法者」であるという先にも引いた有名な文章（JGB211）は、新たな生きざまを示すことで後続の人々に一つの模範を提示するという意味でもある。言い換えると、この意味での「哲学者」とは、特定の生きざまを率先垂範的<sup>6</sup>に示す存在なのである。そしてニーチェは、そうした意味での率先垂範性の淵源を自然史的事実に求めることで、一種独特の自然主義を貫徹していると言えるのだ。そしてそのような率先垂範の自然主義の実践は、ニーチェが「実験哲学」と呼ぶもの（Frühjahr-Sommer1888, 16[32]）の骨格を形作っている。ニーチェの言う「実験」とは、各人が、とりわけ上で挙げた意味での「哲学者」が、自らの哲学、世界観を自ら「生きる」試みをすることである（cf. 竹内 2010）。「われわれ自身が自らの実験であり実験動物であろうと欲するのだ」（FW319）。

ニーチェは終生、偉大な個人による率先垂範こそが多くの人々を拘束するような規範を生んできたのだという考えを持ち続けていた。とりわけソクラテスとイエスという二人の人物の生きざま（と死にざま）が決定的な影響を及ぼし続けていることを繰り返し論じている<sup>7</sup>。逆に言うと、何らかの世界認識、何らかの価値判断を規範として流通させるためには、率先垂範的にそれを生きてみせることが必要なのである。そのような試みが多く為されるべきなのである。いや、私たちは常に既に、そのような試みを行っているはずなのだ。だがそれが実際に規範として受けとめられ流通するようになるかは長い年月が経たなければ分からない。しかしそのような試みが多ければ、未来の人類の可能性が増大することになるのだとニーチェは考えているのである。「来るべき諸世代のために、現在の諸世代が犠牲にされることがなぜ許されないというのか」（M146）。

そして、このような「実験」こそは、生物の進化過程の継続でもあるのだとされるのである。「ダーウィニズムの場合と同様に、人間においても実験が必要である」（Frühjahr1880-Frühjahr1881, 10[B42]）。つまり自然史における無数の個体の生きざまが、後続の個体にとっての「模範」として機能し、進化を支えてきたとニーチェは考えているのだ。それゆえ、こう言い換えることができるかもしれない。ニーチェの実験哲学は、当然起こり得る人間の「変化」を、単なる偶然的「変化」ではなく、「進化」へと転換しようとしているのだ、と。そしてその先に見えているのは、当然、「超人（Übermensch）」である。「認識するために私は生きる。超人が生きるために私は認識したい。／われわれは彼のために実験する！」（November1882-Februar1883, 4[224]）。

かくして、ニーチェが存在論的自然主義を主張することそれ自体が、自然史の継続として位置づけられており、存在論的自然主義の一部である。そしてこのような形での自然主義——つまり

<sup>6</sup> これはニーチェの言葉ではない。オーウェン（Owen1994）が「垂範の倫理（ethic of exemplarity）」をキーワードにニーチェを解釈しており、本稿はその議論から想を得ている。ただし、カントの啓蒙の後継者としてニーチェ（およびヴェーバーとフーコー）を解釈するオーウェンとは、本稿は問題関心が全く異なる。

<sup>7</sup> 偉大な個人の「人格」が規範を生むということ、とりわけソクラテスの「人格」が現代に至るまでの「合理性」という規範を生んだということについては、須藤 2011、36 頁以下、および 138 頁以下、参照。

歴史化された自然へと人間を「翻訳し返す」こと——は、物理主義ではなく生物主義だからこそ可能なものなのである。

だがニーチェの率先垂範の自然主義はまだここで終わりではない。というのも、ニーチェがしていることは、率先垂範の自然主義を採用すべきだという率先垂範だからである。言い換えると、さまざまな率先垂範の実験が行われてきたし行われているし行われるだろうという世界観を生きること自体を、ニーチェが率先垂範的に示しているのである。それも一つの実験であり一つの仮説にすぎない。これこそがニーチェ独自の「自然主義」なのである。

## おわりに

以上をまとめておこう。ニーチェは「自然」を超えたものの存在を認めず、そのような存在は人間の「自然的」な欲求によって「でっち上げられた」にすぎないという存在論的自然主義の立場をとる。さらには自然科学と連続的な哲学という方法論的自然主義もニーチェは採用していた。それは心理学的に同定可能な心的メカニズムが道徳の善悪を作り上げたという主張となり、道徳はある種のタイプの人たち——ニーチェの言う「弱者」——に有利な価値（それゆえ別のタイプの人たち——「強者」——には不利な価値）にすぎないものであることが暴露される。ただし、ある種の価値判断がある種のタイプの人たちに因果的影響をもたらすことは自然的事実として説明可能だが、価値判断そのものは主観的なものであり、自然主義的には理解され得ないように見える。けれども、価値判断は自然史的事実のなかに埋め込まれており、人間において世界観としての「哲学」によってどのように世界を理解すべきかが示されていること、「哲学者」が新たな世界観を自ら生きて率先垂範的に示すこと——ニーチェの言う「実験」——によって新たな規範を生み出すことが自然史の継続と理解されることで、ニーチェ独自の自然主義に立っていることが確認された。そしてその自然史の継続という理解そのものも一つの世界解釈として実験的に示されているにすぎないという点でも、その自然主義が貫徹されていると言えるのであった。

残された問題は少なくない。本稿はニーチェ的「自然主義」の大枠を示したにとどまり、例えば率先垂範の倫理が自然史の継続であるという主張がどれほどの妥当性を持つのかはより詳細な究明を要するだろう。また、本稿で「生物主義」と呼んだニーチェの存在論的自然主義は、本来「生氣論」と呼ぶべきものかもしれないが、その含意と射程についての検討等も、他日を期さなくてはならない。

(たけうちつなふみ 龍谷大学経営学部・准教授)

## 凡例

- ニーチェのテキストは以下のものを使用した。KSA: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari, München, Berlin/New York, 1980; KSB: *Sämtliche Briefe. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari. München, Berlin/New York, 1986.
- 著作略号は以下の通り。MA: *Menschliches, Allzumenschliches*; M: *Morgenröthe*; FW: *Die fröhliche*

*Wissenschaft*; JGB: *Jenseits von Gut und Böse*; GM: *Zur Genealogie der Moral*.

■上記著作からの引用は本文中に略号で示す。略号の後のアラビア数字は節番号、GM に付されるローマ数字は論文番号を表す。遺稿については慣例に従い、書かれた時期・ノート番号・断片番号で示す。

■訳文は全て拙訳。原文の強調は省略し、引用文中の強調は全て引用者によるものである。／は原文の改行、〔 〕は引用者による補足、〔…〕は引用者による省略を示す。なお、原語を挿入する際は、現代の綴りに直すこととする。

## 文献表

Emden, Ch.J. (2014) *Nietzsche's Naturalism: Philosophy and the Life Sciences in the Nineteenth Century*, Cambridge University Press.

井頭昌彦 (2010) 『多元論的自然主義の可能性 ——哲学と科学の連続性をどうとらえるか』、新曜社。

Leiter, B. (2015) *Nietzsche on Morality*, Second Edition, Routledge.

新名隆志 (2019) 「『すべての価値の価値転換』に合理的根拠はないのか ——ブライアン・ライターのニーチェ解釈の批判」、『鹿児島大学教育学部研究紀要・人文・社会科学編』第70号、11-22頁。

岡村俊史 (2009) 「自然主義者としてのニーチェ ——ブライアン・ライターのメタ倫理的ニーチェ解釈」、『ショーペンハウアー研究』別巻第2号、124-135頁。

大戸雄真「分析系ニーチェ研究への招待 ——難解なニーチェ哲学をクリアに解釈する」、『フィロソフィ』Vol.5, No.1、株式会社ミュー、2020年、336-386頁。

Owen, D. (1994) *Maturity and Modernity: Nietzsche, Weber, Foucault and ambivalence of reason*, Routledge. (=宮原浩二郎／名部圭一訳『成熟と近代 ——ニーチェ・ウェーバー・フーコーの系譜学』、新曜社、2002年。)

Reginster, B. (2006) *The Affirmation of Life: Nietzsche on Overcoming Nihilism*, Harvard University Press. (=岡村俊史／竹内綱史／新名隆志訳『生の肯定 ——ニーチェによるニヒリズムの克服』、法政大学出版局、2020年。)

齋藤直樹 (2014) 「ニーチェの「自然主義」 ——その成立過程と理論的射程をめぐって (1)」、『比較文化研究年報』第24号、51-71頁。

須藤訓任 (2011) 『ニーチェの歴史思想 ——物語・発生史・系譜学』、大阪大学出版会。

須藤訓任／児玉斗／竹内綱史／岡村俊史／大久保歩／武田宙也／五郎丸仁美 (2013) 「討議：ニーチェは今、どのように読まれているか」、『現代思想』第41巻第2号、青土社、178-200頁。

竹内綱史 (2010) 「ニーチェの実験哲学」、『理想』第684号、理想社、61-74頁。

—— (2012) 「ニヒリズムと系譜学」、『Heidegger-Forum』Vol.6、1-13頁。

—— (2016a) 「ニーチェにおけるニヒリズムと身体」、『宗教哲学研究』第33号、43-56頁。

—— (2016b) 「ドイツにおける近年のニーチェ研究動向について」、『ショーペンハウアー研究』

別巻第3号、188-204頁。

——(2018)「「神は死んだ」のか? ——ニーチェにおける宗教と科学」、『ショーペンハウアー研究』第23号、50-67頁。

——(2019)「超越者なき自己超越 ——ニーチェにおける超越と倫理」、『倫理学研究』第49号、20-35頁。

戸田山和久(2003)「哲学的自然主義の可能性」、『思想』第948号、岩波書店、63-92頁。

\*本研究はJSPS 科研費 JP18K00051 および龍谷大学国際社会文化研究所の研究助成を受けたものである。

## Nietzsches Naturalismus und seine Ethik der Exemplarität Tsunafumi TAKEUCHI

Das mestdiskutierte Thema in der Nietzsche-Forschung seit Beginn des 21. Jahrhunderts ist der Naturalismus. In diesem Beitrag möchte ich die Reichweite und die Grenzen der naturalistischen Interpretation der Philosophie Nietzsches klären und dabei versuchen, zu einem neuen und einheitlichen Verständnis seiner Philosophie zu gelangen.

Nietzsche akzeptiert die Existenz von etwas das jenseits der Natur liegt nicht, sondern vertritt den Standpunkt des ontologischen Naturalismus, nämlich dass eine solche Existenz nur durch die natürlichen Bedürfnisse des Menschen erdichtet wird. Er vertritt auch den methodologischen Naturalismus, d.h. eine Philosophie, die mit der Naturwissenschaft in Einklang steht. Er behauptet, dass psychologisch identifizierbare geistige Mechanismen das moralisch Gute und Böse geschaffen haben und dass Moral ein Wert ist, der eine bestimmte Art von Menschen begünstigt - bei Nietzsche heißen sie „Schwachen“ - und daher eine andere Art von Menschen - nach Nietzsche die „Starken“ - benachteiligt.

Während es jedoch, so Nietzsche, eine natürliche Tatsache ist, dass ein bestimmtes Werturteil eine kausale Wirkung auf bestimmte Arten von Menschen hat, sind die Werturteile selbst nur subjektiv und entzieht sich damit naturalistischen Methoden. Die Werturteile sind aber, nach Nietzsche, in die naturgeschichtlichen Tatsachen eingebettet und es ist als eine Fortsetzung der Naturgeschichte zu verstehen, dass die exemplarischen Individuen neue Normen schaffen, indem sie selbst exemplarisch ihre eigenen neuen Weltanschauungen leben. Nietzsche benennt solche exemplarischen Individuen des Menschen als „Philosophen“ und er versteht unter ihren „Philosophien“ Weltanschauungen, die uns zeigen, wie wir die Welt verstehen sollen und wie wir darin leben sollen. Diese sogenannte „Experimentalphilosophie“ Nietzsches ist sein eigener Naturalismus. Das Verständnis dieser Philosophie als Fortsetzung der Naturgeschichte ist wiederum eine experimentelle Interpretation der Welt. Auch hierin findet sein eigener Naturalismus seinen Ausdruck.

[キーワード]

ニーチェ、自然主義、率先垂範、生物主義、実験哲学